

白川学研究についての管見

靳 臧
春 克
雨 和
詠 詠

内容摘要

白川静先生の文字学研究の建設的かつ現実的な意義は、まず文字学と考古学、文献学、民俗学等、人類社会文化の各科に共通する学問をうち建て、あるいは文化文字学（一部分の内容は中国文字学界において数年以来通称されている「文化文字学」に相当する）という解釈体系を確立したことにある。この学問体系は、文字学の発展に非常に重要な役割をはたしている。即ち、白川文字学は古文字学、字源分析学を豊かにし、今後新たに出土される文字資料への整理と認知に、実際の使用過程にふさわしい文字発展史の体系をうち建てたのである。白川文字学が提供した多くの学科に共通する方法論は、大いに表意文字の解釈に力を与えている。

中国（大陸）の文字学界においては、白川静先生の文字学に対するいくつかの解釈、更に『詩経』を含めた解釈は、「巫術儀式化」という視点から問題を扱い、あるいはある種の「泛巫術儀式化」や過度の

「神聖化」という傾向が存在するように通常見られている。文字構造の意義を検討し、その起源段階の使用機能を追究する際には、少なくとも当時においてはそのかなりの一部分はある巫術の禁忌から考えられていたのであり、現代の観念と全く一致することは不可能であると筆者は考えている。だが、これまでの中国文字学界ではこれに対してほとんど見て見ぬふりをしてきた。それは、こうした漢字群自体が存在していないからではなく、ただ次の二点の理由によっている。一つは、客観的に見て文字の使用歴史が長く、時代が後に移るに従って、「原始移情式」という抽象形式がだんだんと衰え、日常の実用機能が際立ってきたという点である。もう一つは中国の現代文字学の専門家は、基本的に人類学の知識と教養を持っていない（往々にして古代の学者のいう「今を以て古を律す」、あるいは「説通あやまに過る」という限界が存在する）という点である。

キーワード 白川学、文化文字学（人類社会各科貫通文字学）、

神聖文字、巫術儀式

前言

今回のシンポジウムにより立命館大学を訪れる機会をいただき、本当に幸いである。もし「登堂入室」することができるのなら、昔の典故『景德伝灯録』『景岑禪師』にある「僧問『学人不抛地時如何』、師云『汝向什麼处安身立命』」の通り、まさに学人が自身の「安身立命」の場を見つけたというのに近い。世界の漢学研究において第一流と称されているこの京都の地で講演の機会を得ることは、非常におこがましいことである。このたび文字学、古典学を合流した「百川」とも称すべき白川静先生の母校を訪ねることができて、まるで『莊子』『秋水』篇にいう「河伯」のように「望洋として若に向いて嘆ず」（黄河の水神河伯が、秋の増水した河の流れに沿って黄河の流れ込む北海に到達し、そこで大海の大きさに驚嘆して北海の海神若に向かって歎息したという寓話）という気持ちであり、大変に恐縮に感じている。

(1) 白川学研究の基本現状

白川静先生が1948年に発表された最初の論文「卜辞の本質」に用いられた文字学人類学という方法は、後に続けて発表される諸論文に共通する古文字学の観念、方法や基礎を直接的に築いた。即ち古文字の考釈は主に「巫術儀式」に偏るという傾向である。白川先生は1962年に博士の学位を取得された著作『興の研究』（古典詩において『詩』の「六義」を論ずるときに、分類中に「賦比興」があり、

またその機能を論ずるときには「興觀群怨」という概念がある。後者は最初の文字が「興」である。要するに「興」は、機能においても詩作の方法においても『詩』三百篇を構成するキーワードである」と、直接に人類学の方法を開いた『詩経』の研究とは、同じく「巫術儀式」に偏る傾向を示している。また1969年から1974年にかけて次々と『説文新義』15巻を発表された。この期間に一般読者を対象とした『漢字』、『詩経』、『金文の世界』、『孔子伝』等の普及性の書物を刊行された。1984年に『字統』、1991年に『字訓』、1996年に『字通』を出版された。

白川先生の文字学の学術意義及び今日に行われている文字学研究の参考価値について、筆者にはまだ完全な理解ができていないが、先生の文字学は、主にその著作の『説文新義』15巻、『金文通釈』9巻、『字統』、『字訓』、『字通』等の文字学の専著に表れている。『説文新義』は既に出土した甲骨文、金文及びその他の資料によって、『説文解字』に対して全く新たな考釈と解説を行ったものであると専門家は既に指摘している。甲骨文の発見以来、孫詒讓、王国維、郭沫若、于省吾等の古文字学者はみな新たに出土した資料を用い、『説文』と相互に検証する研究を試みたが（王国維のいわゆる「二重証拠」法である）、白川先生は初めてこの難しい任務を完成したのである。

全体からいえば、中国大陆（台湾、香港地域に関わる最新の状況については未詳）の文字学界では、その著作の厚さが身長に及ぶ白川先生に対して、注目することが非常に少ない。筆者の不完全な理解であるが、1997年北京師範大学国学研究所は「武王克商の研究」の中

で「西周断代と年曆譜」を発表した。白水博士は『五邑大学学报』（哲社版）2004年第3期において「白川静『金文の世界』の翻訳と校補」を発表し、また曹兆蘭は2000年3月に武漢大学出版社で「白川静『金文学史』の漢語文字学成就」を発表した。白水は2004年『江西社会科学』第11期で『金文通釈』選訳」を発表した。また2007年山東大学漢語言文字学専攻のある学生が、2007年の修士学位論文として「白川静『字統』『載書』文字学の訳介及び研究」を完成している。これら大陸の状況に対して、台湾地域における白川先生の巨著に関する翻訳や研究は大陸よりも進んでいる。

今日においても、もし仮に白川先生の学術観念と方法を用い、白川先生の著作を修士学位論文の対象として研究を展開するとしたら、その論文が合格できるかどうかという研究者の憂慮が存在するのである。これが現在における中国大陸の文字学世界の現状である。白川静博士への注目、遠く人類神話学領域（下記の「引用文献」の受容部分に見える）に及ばない。今に至るまで、日本の学者張莉教授のように深く論じた専著は現れていない。白川静先生が後世に残された豊かな学術の宝物、学術成果と意義については、すべて発掘されて活用されることを待っている。更に認識を深め、発生や発展の実状にふさわしい完全な漢字学体系をうち建てするために、そのあるべき価値を發揮させなければならぬ。

こうした現状の原因としては、まず一つの可能性として中国語への翻訳の作業が追いついていないことが挙げられる。これは直接に学習者の読解に困難をもたらしている。周知の通り、中国では日本語を習

う人は多いが、古典専門領域の日本語への認識は非常に少ない。（日本国の若い学者にしても、似たような問題があるであろう。筆者は博士後期の授業で、「稲妻走」「若者」「女坂」のような言葉に触れたが、日本から来た学生であっても往々にして見当がつかないような様子が見られた。）さらにもう一点関連する要素がある。専門的な翻訳の成果は多くはないが、しかしそれは、白川先生の所説が専門家の著作中に直接引用されることには影響を与えていない（例えば、中国神話学会の会長である葉舒憲教授の『詩経の文化闡釈』、前世紀に出版した拙著『尚書文字校詁』等）。だがこうした引用方式の「受容」と「伝播」は、往々にして統計し難いのである。

（2）白川学研究の意義

誠に恥ずかしいことであるが、筆者は白川静先生がうち建てられた膨大な学術体系への勉強が非常に不足しているため、それに対するならんかの意見を出すことはできない。ただここでは、白川先生の学術著述について、個人的な考えを二点、白川先生の母校の先生方の前に提出したい。その目的は非常に明確であり、即ち先生方のご教示を頂きたいからである。

まず白川先生の文字学研究の意義について述べたい。そもそもこの「意義」とは何であろうか。この問題は非常に答えにくく、おそらく philosophy に属する問題であろう。認知の段階についていえば、意義は「何だろう」という質問に答えなければならない。功能の段階についていえば、「意義」は「いかなる役割を果たしているか」と人々は

このように述べるしかできないのである。白川先生の文字学の意義は、まず文字学と人類学をつなげたこと、または「人類社会の各分野に文字学を共通させ」たこと、あるいは「文化文字学」という解釈体系をうち建てたことにある。中国の文字学界における普遍的な見方は、白川先生の若干の文字学解釈、更には『詩経』を含めた解釈は、「巫術儀式化」という視点から問題を扱い、あるいは「泛巫術儀式化」という傾向があるということである。最近、白川先生の「神聖文字系列」の若干の問題を指摘した学者もいる。⁽²⁾しかし筆者は、文字構造の意義を検討し、その起源の使用機能を追究することは、少なくとも当時においてはそのかなりの部分はある巫術の禁忌から考えられているのであり、これは当時の人類社会の生活環境に適合したものであると考えている。しかし、今に至るまで、文字学界ではほとんどこれに対して見て見ぬふりをしてきた。それは、こうした漢字群自体が存在していないからではなく、ただ次の理由によっている。一つは、客観的に見て文字の使用歴史が長く、時代が後に移るに従って、「原始移情式」という抽象形式がだんだんと衰え、日常の実用機能が際立ってきたという点である。もう一つは中国の現代文字学の専門家は、基本的に人類学の知識と教養を持っていない⁽³⁾という点である。筆者の推測が成立するとすれば、現代の文字学界の「今を以て古を律す」、あるいは「説通に過る」という限界がなお普遍的に存在すると理解してよいだろう。

少なくとも一部分の名や事物を記録する字形構造は、一種の儀式の概括描写によって形成されたのである。例えば後に取り上げる海の神

様の名称「若」の字形である。一部の活動行為を記録する構造は、影響を与える行為の字形により表すのである。例えば、「告」は「牝」の初形である。前者ならまだ理解しやすいが、後者は古から去ること遠く、「為」の字形に関する解釈のようである。(後漢の学者許慎の『説文解字』に見える「母猴」の描写はもとより取るに足りないが、早くに甲骨文等の出土資料を用いた羅振玉がいわゆる「役象以助勞」という新たな考証でも、まだ牽強附会の段階に留まっている。人の手を画いて、象の鼻に位置すれば、なぜ象を役使することになるのであろう。このようなやり方は、更にある種の「コントロール」による「作為」である。)後者のような一種は、一般人には受け入れにくい。白川先生の大量の著述は、創新に富み、人々に多くの啓発をもたらした。筆者は古籍と出土した古文字材料とを合わせて研究する過程で、問題を解決できる実際の例を用いて上述の観点を説明したい。1999年に出版した拙著『尚書文字校詁』の中では、少なからぬ箇所において白川先生の巨著『金文通釈』の啓発を受け、その観点を受容している。例えば、「甘誓」篇「王若曰」に関する解釈は、直接に『金文通釈』を引用している。

兩周金文也有不少「若曰」的辞例、如毛公鼎銘文「王若曰、父厝不显文武」、孟鼎「王若曰、丕显文王」、克鼎「王若曰克……」為通例、指史官或大臣代宣王命。

その後、金文と関連する用例の資料統計と結び付け、再び白川先

生の観点を証明した。『金文雜考』第七条「王若曰」において、以下のように筆者は述べている。

「迷盪」銘文にも「王若曰」という表現方式が使用されている。王輝先生は于省吾先生の説に従い、その中で最も多く説が分かれている「若」字について、代名詞、如此、這樣と解釈している。甲骨文、金文においては、史官は王や貴族の話を伝達する時、往々にして「若曰」という。この解釈は、銘文の「時態」、即ち具体的な書写時間を確定するのに直接に関連する。「師虎簋」銘文釈文に「唯元年六月既盟甲戌、王在杜居、格於大室。井伯入右師虎、即立中廷、北嚮。王呼内史吳曰、冊令虎。王若曰、虎……」とある。「王若曰」という句は、銘文の前後と結び付けて、「若」字を「如此、這樣」という伝述関係と理解しても自然である。そうでなければ、二回「王曰」が続くことになり、自然な語順とならないのである。

『今文尚書』の中では「王若曰」は11回ほど用いられ、周代金文では24回ほど使われている。周王以外の方が用いた「若曰」と合わせて統計すれば、約26条あり、ともに周代に限られている。ここから分かるように、この言語構造には二つの特徴がある。一つは使用者の身分は基本的に周王であり、他の身分のものが用いるのは特殊な例である。例えば、「逆鍾」の「叔氏」、「師□簋」の「白(伯)穌父」のような例である。二つ目の特徴は周代漢語の特殊な形式を表しているという点である。銘文にも同じく「王曰」という形が用いられているものがあるが、概ね数万枚の拓片に50余回使用されているだけである。関連の考察によると、「若」字は上古漢語の記録と使用の中において、「然

諾、答復」と「這麼、那麼」という二つの基本的な意味があるはずである。

「王若曰」という形において、もし「若」が一番目の意味を承けているとすれば、この構造の中で「若」字は発語「曰」の前に用いられ、その機能は「曰」と重なっていることを表しているのである。漢語ではこのような「発言重疊」の標識はよく見られ、現在でも「回答説」「告訴説」「答復云」が使用されている。その早期の現れとして、この「王若曰」の形とあるいはつながりが存在するという可能性もある。

「若」が二番目の意味を承けているとすれば、この構造において「若」字は発語「曰」の前に用いられ、一種の指代性がある。もしこの推測が成立するならば、銘文に記載された周王や貴族の訓誥の内容は、「過去体」であることを表している。換言すれば、銘文の作者が記録した内容は、当時の王や貴族が現場にいない、いわゆる非現場における情報伝達の「追憶体」である。銘文を彫る者が王の誥詞を聞きながら鋳型に書写する可能性は無く、普通の状況では、史官により伝達されたはずである。「王若曰」の主な機能はこのような伝述追憶を表記する語体の名残りであり、そうでなければ、ただ一般の語気を表すのみであって、「王曰」または「×曰」の形となら変わらないのである。勿論、我々はこれによって「王曰」あるいは「×曰」という形に「伝述追憶」の機能が具わらないとは言えない。「迷盪」銘文についていえば、銘文全体が「迷曰」の内容を記載するものであり、中に「王若曰」の内容を挿入し、それで二者の前後の順を明確にさせている。「揚簋」の銘文の「王乎(呼)内史史年冊令(命)揚。王若曰、揚、

……」では、明らかに「王若曰」の後の内容は内史により冊命の形で伝達されたのである。「若」に「如此」という意があることは、早くには王引之の『経伝釈詞』に見えている。その巻七「若」条に、『史記』「礼書正義」に曰く、「若は、此くの如き也」。『書』「大誥」に曰く、「爾寧王之若く勤むるを知る」。此くの如く勤むるを言うなり。『孟子』「梁惠王」篇に曰く、「若く為す所を以て、若く欲する所を求む」。若は、猶お「此」のごときなり。莊公四年の『公羊伝』に曰く、「明天子有れば、則ち襄公得て若く行うを為さんや」。此く行うを謂うなり」。しかし問題は、王氏が挙げた例の中に「若曰」二字連続の例が見当たらない点である。

ここで、白川先生がかつて考釈された「若」字を例にして、少し具体的に説明する。

『中国文字発展史』「商周文字」巻においてコーパスを使って「網羅的」な統計を行った結果によれば、「若」字は殷商の甲骨刻辞の中では典型的な「高頻度」で使われる文字である。『甲骨文集』データベース（新出土資料は未統計）のみから選ばれた用例だけでも883条にも達している。例えば第一期刻辞に「帝不若」の辞例がある。

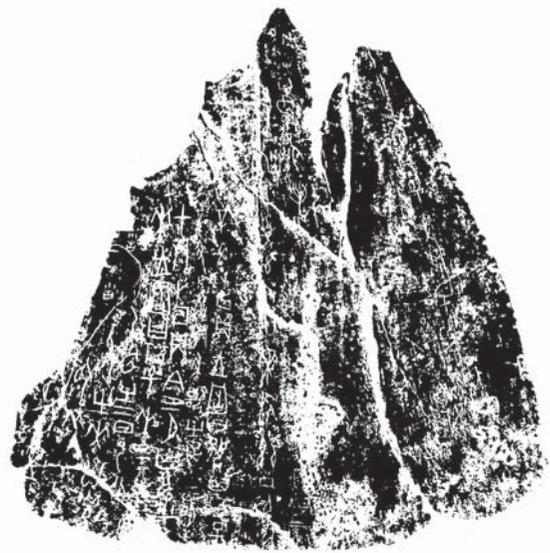
〈正〉

帝□□□不若。二月。

〈反〉

帝□□□不若。

データベース処理される前の拓片は下記のようなのである。



拙著『漢字単位觀念史考述』第6・3「若字族」⁽⁵⁾に詳しい関連分析がある。

『説文解字』「艸部」の「若」字の後に、出土文献で用いられた「若」字と小篆とを並べて比べてみると、その変遷史を観察することができる。「若」の甲骨文、金文、簡帛、石刻の例を示す。



香艸。而灼切。」⁶⁾

上に挙げた「若」字の解釈例についていえば、中国大陆に甲骨文の学問ができて以来、現代のあらゆる解釈に至るまで、ほとんど解釈が適切になるように見えるのであるが、実際はすべて「説通に過る」であり、反対にどれも白川静先生が考釈された結論の純粹さと明確さに及ばないと筆者は考えている。その理由は、白川先生が文化文字学と人類社会環境文字学の方法を融合し共通させたことにある。勿論、白川静先生の大量の著述の中には、確かに幾つかの民俗儀式を文字解釈の過程に当てはめて、「類を充てて尽に至る」という極論に至る一面が存するのであるが、地下に眠っている大量の新しい資料が発見されるにつれて、この方面に存在する問題が解決できると我々は信じている。

(3) 白川学の今後についての管見

前世紀末期、人類学や神話学領域の研究者は、既に白川先生の研究成果に大きな注意を払い、大量に引用した。今世紀に入ってから、白川博士の文字学の著作を中国語に翻訳した者もすでに現れている。⁷⁾ 情報のグローバル化が進むにつれて、科学的に先生の豊富で厚みのある文字学、『詩経』学の研究方法や研究成果（例えば『詩経』の解釈で、「国風」中の「碩鼠」など幾つかの篇目に注目して、白川先生の上古の巫術儀式は人類社会生活環境と関わるという認識を受け入れ、これまでの「今を以て古を律す」という解釈を変えるなど）を発掘し利用

するという状況は、今後益々増えていくと筆者は信じている。ちなみに、筆者は2006―2007年にヴィルヘルム大学でドイツ学術連合会(DFG)の出土文献と古代社会に関する全世界公募項目の中で、簡牘、帛書などを調査した時、これらの材料の普通の整理研究者には、普遍的に学問への「隔膜」が存在するという現象に気づいた。その事実を探ってみると、欠いているのは白川学の視点と方法である。具体的な課題や議論の内容は、後に文章を集めて出版した拙著『簡帛と学術』で具体的な考察を行っている。⁸⁾

上述の要素に基づき、グローバル化した現代の学問の生き方として、異分野の研究手法の成熟を推進していかなければならない。白川学の成果と方法は、必ず今後ますます重視されるであろう。老き^老学問を、新たに相知ることである。浅薄で時代の潮流に乗り、その時には流行っていたが、後に消え去る学問もあれば、重厚で時代の先を行き、時間の経過を経てはじめて人々に改めて認識される学問もある。少し学術史に注意すれば、思い半ばを過ぎるであろう。白川学は、まさに後者に属するものである。

先生方に深甚なる謝意を捧げたい。また皆様からのご批正を期待しています。

2016―10―30

注

- (1) 私と白川静先生とのご縁は浅くないと言えるだろう。筆者は中国上海の華東師範大学図書館の埃だらけの片隅で、偶然にも先生の『金文通釈』日本語の原本を見つけた。それは即ち平凡社によって出版された九巻本であった。また先生の御著書である『詩経研究』も、日本語版の原本を、ヨーロッパドイツのヴェルヘルム大学漢学系図書館で拝読したのである。
- (2) 連登崗「白川静『神聖文字』系列的若干問題」、『中国文字研究』第24輯、上海書店、2016年。
- (3) 臧克和「古漢字結構取象類型原始移情考略」、『學術研究』1999年第5期。また臧克和「漢字單位觀念史考述」第76「雜志六」、第238—258頁に収録。また臧克和「巫術思維與一類古漢字的發生」、『ドイツヴェルヘルム大学』ORIENTIERUNGEN(東方学)、『ドイツ語本』2005年第1期。
- (4) 臧克和「金文雜考」、『古文字研究』第20輯、中華書局2003年。
- (5) 臧克和「積『若』」、『殷都學刊』1990年第1期に掲載。また李圃先生主編『古文字話林』第一卷「草部」第530—534頁。上海教育出版社、1999—2004年。臧克和『漢字單位觀念史考述』第168—177頁、上海學林出版社、1988年を参照。
- (6) 臧克和、劉本才編『實用說文解字』「艸部」第25頁、上海古籍出版社、2012年。
- (7) 白川静著、朱家駿訳『漢字』三卷、厦門大学出版社、2005年。
- (8) 臧克和『簡帛與學術』第109—113頁「楚簡所見禳災術」、鄭州大象出版社、2010年。ここでは戦国の楚簡を解説する例を挙げておこう。上海博物館藏『戦国楚竹書』第四冊「東大王泊早」について、整理者は以下のような見解を発表した。…本篇はもともと無題であり、今の題目は全文の首句を取ったものであるが、全文の中心主題でもある。本篇は戦国時代早期の楚国の簡大王に関する逸事を二つ記載している。即ち、簡大王が疥癬を病んだことと楚国の大旱とである。「簡大王泊早、命龜尹羅貞於大夏。王自臨卜。」とある。編者は第一簡の簡文を解釈して「泊、或は「怕」に通ず。王は疥瘡病に患ひ、疥瘡病は唇が燥いて口も渴き、奇痒がある、故にまた干早を怕る」という。この解釈と上述の全文への理解とつなげてみれば、編者は楚簡王の疥病と当時楚国で起った大旱を二つの事情として見ているのである。しかし、全文の卜占祭祀と関連づけてみれば、これは誤解である。天から降った旱魃と楚王がかかった疥病とは、楚人からみれば、実際は同じ「干早」として現れているのである。換言すれば、天の干早と楚簡王の身にかかった皮膚病との二者は、相互に影響しているのである。

これに基づけば、本篇の題目は「楚簡王止旱」としか解釈できない。即ち楚王が旱をどうにかするために採用した措置に関わることである。これは後文の「向日」「遮日」と呼応し、また簡文全文の卜占して祭祀を行い「早母」を祓除するという中心内容と一致する。従って、「王自臨卜」とは、即ち楚簡王は自ら臨御して卜占を行ったのである。簡文原文では次に「王向日而立、王滄至帶」とある。編者は古人が明るい方に向かって立つのは、高明広大の様子であるというのは、「今を以て古を律す」「類を充てて尽に至る」というものである。日に向かって立つのは、早を禱る儀式の特徴である。日に向かって矢を射るという動作を行うに至ったのは、法術の影響が加わった変容であり、后羿の流れが、このようになったのであろう。日の下に曝すという行為については、文献に類繁に出てくる。もし白川先生にお訊ねすることができるのであれば、どちらが正しくてどちらが誤っているのか分かるであろう。

しかしこのような出土文献への解釈例は、ここ数年の中国大陸の古文字学界ではなお前述のような現象が普遍的に存在していることを反映しているのである。

(華東師範大学終身教授)